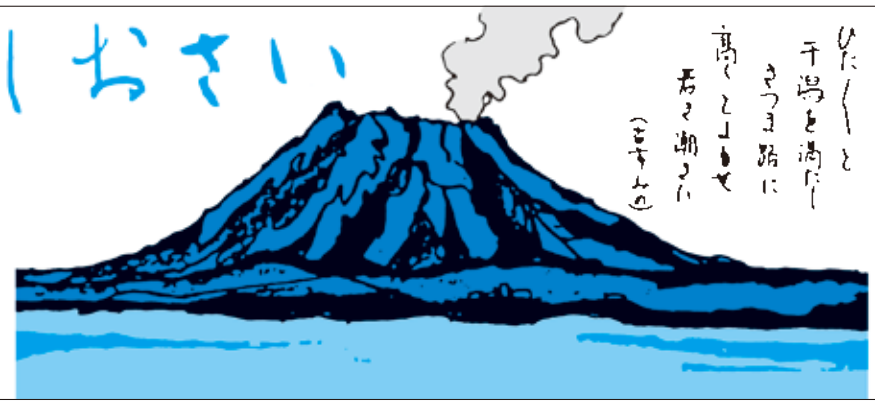

編集発行人
鹿児島大学医学部附属保健婦学校
鹿児島大学医療技術短期大学部専攻科地域看護学特別専攻
鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻
同窓会(しおさい会)
事　務　局
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8丁目35-1
鹿児島大学医学部保健学科
地域看護・看護情報学講座内
連絡先　会長　藤野　瑠美
電　話　[redacted]

ごあいさつ

会長　藤野　瑠美（S46年卒）

早春の候、水仙や紅梅の香り漂う陽だまりに、暫し寒さを忘れてしまいます。皆様におかれては、お変わりなくお健やかにお過ごしのこととお喜び申し上げます。いつも、しおさい会にご理解とご協力を頂き、感謝申し上げます。

今年は隔年ごとに開催されているしおさい会の総会の年です。既に、クラス連絡員を中心に、今年も総会へ出席しよう、と話が始まっているところもあるようです。今回も趣向を凝らした計画を考えています。きっと皆様に喜んで頂けると思っています。多くの会員の皆様とお会いできることを楽しみにしております。

ところで、今年は戦後70年を迎えていることから、昨年から、様々な場面での戦争体験が報じられ、私たちに平和の大切さを伝えています。

これまで、しおさい会の先輩方からも、貴重な体験をお聞きしています。戦時下の厳しい環境の下で、保健師教育を受けられ、学校での実習や勉学は困難を極める中、強い友情の絆を育んで来られた様子などお聞きしています。戦争を知らない世代の私たちにとって、とても貴重なお話です。是非機会あるごとに語り継いで頂きたいと思います。

ここで、少し本学の歴史を振り返ってみますと、本学の保健師教育は、昭和17年4月「社会事業協会保健婦養成所」として開校しています。まさに第二次世界大戦中の事です。翌年「鹿児島県立保健婦養成所」となり、興健女子学院、県立看護学校公衆衛生看護学科、県立公衆衛生看護学院と変遷を繰り返し、昭和36年、県から国へ移管され「鹿大医学部附属保健婦学校」となり、平成元年「鹿児島大学医療技術短期大学部専攻科地域看護学特別専攻」を経て、平成11年現在の「鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻」になりました。

本学で教育を受けた多くの保健師たちは、地域社会の変化に対応し、いつも住民の傍らに寄り添う保健活動をしています。

今後も、鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻がますます発展することを希望し、歴史ある本学の保健師同窓会「しおさい会」もしっかり応援して参りたいと思います。

さて、当会は会員の会費で運営されております。多くの会員の皆様には毎年会費を納入して頂き感謝申し上げます。クラス連絡員の皆様には、毎回会員の消息確認などと併せて会費納入の働きかけにもご協力いただいています。保健師の新規会員加入の減少が見込まれる中、会が今後も円滑な運営を続けていくためには、引き続き皆様方のご協力をお願いいたします。

また、会の活動を伝えるために、会報を作成し、住所の分かっている会員全員に送付しております。しかしながら、長期間、会費の納入を頂けていない会員への会報等の送付は、今後の運営を圧迫するのでないかと懸念する声が聞かれています。是非、会の運営についてご意見をお聞かせください。

今日も、桜島は噴煙を上げています。記憶に新しい御嶽山の噴火では、紅葉を楽しむ家族連れや友人等多くの方々の尊い命が失われました。降灰に困りながらも、桜島の景観を愛で、シンボルとしている鹿児島にあっては、災害の脅威を自分たちのこととして感じたところでした。

今年は、災害の少ない穏やかな一年であることを願い、皆様にとりまして、健やかで良き一年でありますよう祈念いたします。

第18回 しおさい会総会のご案内

日　時　平成27年8月1日(土)
会　場　城山観光ホテル
受　付　9:30
総会・研修会　10:00～12:30
懇親会　12:45～15:30
会　費　5,100円

「看護の豊かさ・楽しさ再発見」

鹿児島大学医学部
地域看護・看護情報学講座
教授　丸谷　美紀

鹿児島の人々の温かさと、それに呼応した地域看護実践に触れさせていただき、このことを実感しました。私は、千葉県で16年間保健師として勤務した後、５年間大学院で就学し、その後９年間地域看護学の教育に携わってきました。看護は、その人の力が最大となるよう、安寧を提供するものです。しかし、教育に夢中になっているうちに、安寧どころか眉間にしわを寄せていたようです。鹿児島に来て、看護の豊かさ・楽しさを再発見できました。

まず、大学をはじめ地域の方々の温かさ、大きさに感服しました。４月の離島保健学では、元気な４年生と一緒に桜ヶ丘キャンパス内にフィールドワークに出向きました。学生の成長を見守ってくださる方々の温かさに触れ、看護教育は多くの方に支えられていることを再認識しました。５月は離島地域看護学実習で、中種子町に〈愛〉を背負って行きました。商店の一角を開放して近隣の高齢者が集える場を設けたり、「様も姿もなく」互いの生活に関わっていらっしゃる方々の大きさに感服しました。中種子町への往路で背負って行った〈愛〉よりも何十倍もの〈愛〉に満たされて帰りました。

次に、「しおさい会」や地域看護学実習で、看護の可能性・大きさ・面白さを実感しました。５月の「しおさい会」では、東日本大震災の復興支援に携わられた方の報告を伺いました。鹿児島で育まれた地域看護の技と心を、他県へ出向いて分かち合っている姿に敬服しました。また、６月以降の地域看護学実習では、都市部の母子保健の問題に対して、家族のように親身に寄り添って、ともに悩み喜ぶ保健師さんの実践を伺いました。また、過疎地域の高齢者の生活を、地元の人々とともに知恵を出し合って対応されていることを知りました。

互いを気遣い支えあっている地域の人々と、その方々と共に知恵を出し合って困難を乗り切り、更なる高みを目指している保健師さんの活動を教えていただき、感謝します。地域看護学とは、無限の可能性を持つ実践の学問だと再発見しました。この再発見は、地域に出向き住民や保健師さんと直接触れ合ったからこそ得られたのだと思います。今後は、一人でも多くの学生に実習を経験してもらい、地域看護学の豊かさ・楽しさを分かち合っていきたいと思います。

末筆ながら、しおさい会の益々の御発展をお祈り申し上げます。

本年度末をもって、波多野浩道教授が退職されます。平成12年４月に地域看護・看護情報学講座に教授として着任されて以来、学生教育や研究活動等に尽力してこられました。また、本同窓会活動へも特別会員として様々な形でご協力を賜りました。会員一同、心より感謝の意を表するとともに、今後のご活躍を祈念いたします。なお、藍野大学（大阪府茨木市）で教鞭をおとりになります。

第6回 しおさい会セミナー報告

【日時】平成26年5月31日（土）10時～12時
【場所】鹿児島大学医学部保健学科　地域・老年看護学実習室
【講師】合田マリ子様（昭和50年卒　14回生）
【参加者数】保健学科学生56名、同窓会員30名、学校関係者4名

今回のテーマは「地域看護のおもしろさ・しんどさ～出会いは理解の第一歩～」とし、学生と同窓会員とが一緒に、保健師活動について共感できる場となりました。

藤野会長から、しおさい会は世代を超えた保健師の交流の場であること、同窓会として保健師のつながりの場であることが紹介されました。

また、保健学科地域看護・看護情報学講座教授の丸谷美紀先生から、しおさい会は学生にとって学びと交流の場になっていることや、新任保健師への大学によるフォローなどをご紹介いただきました。

講演では、14回生の合田マリ子さんから、38年間の保健師活動を通して感じられたことをお話し頂き、感動と笑いの溢れる和やかな時間となりました。合田さんは、鹿屋保健所に在職中、被災して間もない岩手県陸前高田市へ支援に行かれています。現地では、妻を亡くしながらも遺体安置所で働く職員との出会いによって、「住民とのつながり」や、「自ら住民のもとへ出向く」という保健師として重要なことを再認識されたそうです。

定年退職を機に1年間、今度は福島県へ支援に行かれました。その理由として、これまでの人生の中で感じた、周りの人への深い感謝の思いがあったからだそうです。退職後も知識や経験を生かして、人の役に立ちたいという合田さんの熱い思いを感じました。

実際に福島で活動されて、被害の大きさを実感されたそうです。震災から3年過ぎた今、津波被害者数を震災関連死数が上回っているという現状があります。放射線に関する風評被害もいまだに深刻だそうです。そのような中、住民を置いて逃げるわけにはいかないという、自らも被災した町の保健師の思いを強く感じたそうです。合田さんは、町の保健師が活動しやすい環境づくりのため、事務作業なども精力的に行われました。災害時支援から、「平時にできていないことは有事にもできない、平時の活動が大事」だということを学んだそうです。合田さんは長年の保健師活動において、心身障害児や精神障害者の親に寄り添ったり、ハンセン病元患者の尊厳回復のための支援に携わったりされたそうです。現在は、地域包括ケアシステム構築に向けた、医療からの連携促進アプローチ活動を行っていらっしゃいます。

最後に、合田さんは、「保健師の仕事は、母子保健法等、法で定められた全国どこでもやって当たり前の仕事で、出会いは自分自身を成長させてくれるものであり、様々な出会いがある保健師という仕事をやってきてよかった」と締めくくられました。

講演後のディスカッションでは、学生と同窓会員の活発な意見交換が行われ、お互いにたくさんの刺激を受け、明日からの活力となる楽しい時間を過ごすことができました。

（文責　田中）

グループディスカッションの内容について

合田マリ子氏の発表に引き続き、12 グループに分かれ意見交換をしました。その内容の一部をご紹介いたします。

○合田マリ子氏の発表について

・「平時にできないことは有事にはできない」という言葉が印象的で大事にしたいと思った。

・定年退職されてからも、誰かの役に立ちたいとの思いから行動している。自分も見習いたい。

・災害時の保健活動のあり方を考えさせられた。

学生、会員問わず合田氏の力強さや行動力に感動している感想と災害関連死、災害時の保健活動について考えるきっかけになったとの感想がありました。

○なぜ保健師になったのか?保健師になったきっかけ・やりがいは?

各グループで学生から会員へ質問がありました。会員からは・「身近な保健師にあこがれていた」・「大学に編入して保健師に興味を持った」・「学生時代に看護師になろうと思っていたが、しおさい会に参加して保健師を選んだ。」・「自分の育児・出産などの経験を仕事に活かせる。」自分自身の学生時代や保健師活動を振り返ったやりとりがされました。

○その他

男子学生から「保健師・看護師には男性が少ない。」との不安の声がありましたが、会員からは「少ない中から築いていくのは難しいが、やりがいはある。」と励ましの声がありました。

しおさい会セミナーアンケート結果

セミナー参加者90名のうち、71名より回答をいただきました。

◆年代

10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	計
8人	54人	1人	1人	3人	4人	71人

◆職業

学生				市町村職員		県職員		学校･教育関係		その他
1年	2年	3年	4年	元	現役	元	現役	元	現役	
3	5	26	20	1	2	1	7	1	2	3

学生は３・４年生が７割以上を占め、改めて“保健師”を知る機会になった、と多くの声がアンケートに寄せられました。また1･2年生にとっても、直に保健師と話が出来る貴重な時間となったようです。以下に一部ですが、参加者の声をお届けいたします。

・保健師についての印象が変わった。とても興味を持つことができた。

・今できることをやろう、という言葉が進路に向けての励みになった。

・人との出会い・つながりを大切にしていくということが、地域看護につながると思った。

・保健師の活動は、何歳になっても、どこに行っても出来ると気付かせていただいた。

・実際に働いている保健師さんと話せて、将来の選択の役に立った。

その他、もっと話をききたかった、もっと語り合いたかったなどの意見も多く、充実したしおさい会セミナーとなったようでした。

第18回しおさい会総会に参加して

しおさい会セミナーに参加して

看護学専攻４年
片山　栞

今回、初めてセミナーに参加させて頂きました。これまでに実際の現場で活躍されていらっしゃる保健師の大先輩にお会いできる機会は多くなく、数か月前より、この日を楽しみにしてきました。

そして迎えたこの日！いよいよセミナーが始まりました。まず合田マリ子先生より『地域看護のおもしろさ・しんどさ～出会いは理解の一歩～』というテーマでご講演を頂きました。鹿児島県に在職当時、東日本大震災の被災地である福島に復興支援に携わられた経験について、またその経験を機に、退職後には福島県でのお仕事に向かわれたとの話を伺いました。保健師として、一人の人間として何ができるかを考え、実際に行動に移された先生の姿に感動しました。また、被災地で働く際に「自身の役割は何か？」と考え、「その地域で働き、町の人々が慣れ親しんでいる保健師が、直接住民のもとを出来るだけ多く訪れる事ができるような環境づくりに徹しよう」とその役割を見出されたとの話を聞き、相手（対象）のことを常に考え行動されるその姿勢に多くことを学びました。更に「出会いの学び（みる）」から、「つなぐ・動かす（広がる）」につなげていくことの大切さについても話され、長年の保健師経験が今のご自身をつくってきたこと、福島での職務を終えた今も鹿児島に戻り新たな職に就かれるなど、得られた学びを原動力に、更に次へとつなげている姿に感銘を受けました。

講演の後、グループワークでお話をさせて頂いた保健師の諸先輩方から「保健師は出会ったその人から成長させてもらえる職業であって、人との関わりから多くを学ぶ」との声がいくつも聞かれ、人と人とを繋いでいく保健師の仕事について、その魅力を語られました。

翌週からは、保健所ならびに市町村での地域看護学実習に臨みました。その際、私自身も多くの地域住民の方との出会いを重ねる中で、一部ではありましたがセミナーの際に頂いた言葉の意味を改めて実感する事がありました。今回の多くの出会いを通して学んだ事を、将来は自分が保健師となり生かしていきたいと思います。と同時に、最終学年として保健師の魅力やその力を後輩たちへとこれからもつなげていきたい、自分自身もその継承者になっていきたいと決意しました。

しおさい会セミナーに参加して

看護学専攻２年
當房　見毬

私は、もともと保健師や養護教諭といった職業にも興味を持っていたので、今回このしおさい会に参加しました。しおさい会にいらしていた保健師の先輩方は皆とても優しく、終始和やかな雰囲気で会が開かれました。私は２年生ですが、班に分かれて看護の先輩方の話を聴いたときに、まだまだ自分でもいろいろな経験をして、多角的な面から物事を見ることができるようになりたいと思いました。また、自分の夢を語ることで、その夢に近づいていきたいという思いが一層強くなり、自分の目標を再確認できた気がします。

しおさい会に参加して感じたことは、周りとのつながりは大切だということです。この会に参加して、新たにできたつながりもあります。同志がいるから頑張れ、時にはよき競争相手でもあります。現３年生から保健師は選抜制になり、選抜に入ることができるのは一握りです。狭き門ですが、夢を諦めることはできません。今回、同じ目標を持った学生が集まる機会を作ることで一緒に頑張ろうという気持ちになることもできました。

私は、将来は生まれ育った鹿児島で地域医療に携わりたいと考えています。ひとりひとりの気持ちを大事にでき、自分の意思をしっかり持っている、そんな人になりたいです。そのために、これからも、学生としてやるべきことを疎かにせず、大学で出会った仲間たちとのつながりを大切にしながら、成長のある大学生活が送りたいと思いました。

２年に１度という貴重な会に参加することができ、とても嬉しく思いました。このような機会を設けて下さり、本当にありがとうございました。

卒業生からのメッセージ

曲がり角の先は見えない…

S46年卒　徳留　真子

「私は、八〇歳を過ぎたら何をするのだろう、何ができるのだろう・・・」九〇歳を超え、なお元気な母の側で、私は妙な自信と不安を感じていたのを思い出す。

今から?年前、百歳で旅立った母の終末期の二年間に寄り添いながらも、私は母の最期に立ち合えなかったことが非常に悔やまれて仕方なかった。臨死期に関する知識があいまいだった為に、最期の兆候が認識できなかった。母にはもう少しやることがあったのではという思いも強く残った。そして、看護をもう一度勉強しようと看護協会主催の「エンド・オブ・ライフ・ケア」研修を五日間受講し、改めて後悔、納得した。死が避けられないとしたら、私はどんな状況で死を受け入れられるだろう?研修後の私の課題?である。

私は退職後、三十年余り過ごした東北仙台を離れ、故郷の宮崎に夫と帰郷して五年になる。現在、地域のふれ合いボランテア活動を月一～二日、また、看護協会「まちの保健室」活動を当番制で月一日行っている。限られた活動ではあるが、出会う高齢者の方々の思いや悩みを聞いたりすると、どんなことがあれば、老いや病や死をコミュニティの中で穏やかに迎えることが出来るだろう、自分自身の問題としても捉え、考えるようになった。宮崎市には先駆的な取り組みを行っている「特定非営利法人・ホームホスピス宮崎」の活動がある。空き家を借りて終末期の高齢者を五人まで引き受け、地域のボランティアと介護職で生活を支えている。帰りたくても帰れない事情の高齢者や家族で抱えられない方を我が家同様に生活の保障・支援をしている（有料）。行政からは家賃半額の助成を受けるだけ。ケアマネジャーも訪問看護師もそれぞれの高齢者ごとに担当が訪問している。やはり長年の保健師としての血が騒ぐのか、私もこのホームホスピス活動には心が動いた。私にも何かできないかと。

そして、今年の五月から「まちの保健室」の仲間と終末期ケアに関する勉強会を重ねている。終末期が深刻になる前にどんなことが地域で出来るだろうかが目標である。私自身老いも感じ、道は狭まり一本道でもない。曲がり角の先は見えないけれど、どんな道を見つけ、活動していけるか：楽しみでもある。

“つながってま～す”

S60年卒　大原　三枝

福岡市役所に就職してはや30年。入庁前の相談電話をしたのはお会いしたことのない先輩（河野みどりさん）でした。そして翌年、福岡市役所受験に来た初対面の後輩（立石繁美さん）を我が家（アパート）にお泊めしたことがつい先日のようです。

福岡市は２００名を超える保健師が働いています。そのうち、鹿大同窓生は７名と少人数ですが、地域活動をはじめ，精神保健福祉，介護保険、母子保健福祉（児相）等で、それぞれ頑張っています。

同窓会の発起人は，城山時代を知る早川文子先輩。山元先生との太いパイプで福岡市に入庁する後輩情報を毎回入手されていたとのことです。入庁時にお声掛けいただき心強かったことを思い出します。近年は，なかなか同窓生を把握することが困難な状況にある中、平成21年第１回目を開催し，その後毎年１～２回集まり，思い出話や情報交換をしつつ、おなかも心も幸せいっぱいな充電時間を過ごしています。

子育て中の仲間も多く，いつも４～５人の参加状況ですが、これからも、細々ながらゆったりと続けていきたいと思います。

職場紹介

～鹿児島市南部保健センター～

S59年卒　田中　みゆき

南部保健センターの職場紹介を書かせていただくこととなり、建物の建て替わった経過を文章の中に織り込もうと、倉庫にあった「保健師業務のまとめ」を開いてみました。読むうちに、保健センターが地域の中で機能している真の意味は、積み重ねてきた保健師活動であることを改めて感じております。

南部保健センターは、平成25年12月に西谷山に移転しました。親子つどいの広場「たにっこりん」と隣接し、12月24日には森市長等を来賓に迎え、セレモニーが盛大にとり行われました

（写真１）。保健センターは２階建てで、健診等で使用する各部屋が広くなり、相談室が増設され、新たに、授乳室、情報・多目的スペース等が設けてあります。

南部保健センター管内の人口は、１４８，１６５人（平成26年３月）で、平成25年の年間出生数は、１，５８７人。高齢化率は、１８．３％（市２３．１％平成25年）です。

保健センターは、所長（医師）１名、地域保健係（事務３名、栄養士１名）。健康増進係（係長１名含む保健師12名）で構成されています。（写真２）保健師の年齢構成は、50歳代３名、40歳代４名、30歳代２名、20歳代３名とバランスもよく、各自の持ち味を生かし、業務に取り組んでいます。乳幼児健診や健康相談等の母子保健事業は、年間二百三十回を超え、介護予防事業である「お達者クラブ」は61ヶ所となっています。常勤保健師だけでは実施できない為、30名超の非常勤の保健師・助産師等に従事していただいています。非常勤の保健師の中には、「しおさい会」の会員の方々も数多くおられ、大変心強いところです。地域住民の健康づくり活動を全職員で取り組んでいることを誇りに思っています。管内は公共交通機関の利用できる地域が限られているため、訪問用の公用車や電動アシスト自転車等が配備され、フル稼働しています。

鹿児島市の保健師は、地区担当制と業務分担制を組み合わせながら、母子・成人保健、介護予防、結核等の感染症対策、ボランティア育成支援等、幅広く地域の保健活動に取り組んでいます。保健師一人あたりの担当人口は、一万三千人程となっています。

【歴史と概要】

昭和42年４月
谷山市との合併により谷山地区を中央保健所管内に編入。谷山支所内に中央保健所谷山分室が設置され、保健婦３名配置。

昭和42年８月
谷山錫山地区移動保健所開設（現在も健康相談として実施）

写真１

昭和45年
五ヶ別府、火の河原地区移動保健所開設（現在も、火の河原健康相談、五ヶ別府健康教育を実施）

昭和51年８月
谷山分室が谷山保健センター（南部保健センターの前進）に改称され、公衆衛生係・保健予防係で、課体制となり初代所長に保健婦が起用される。

昭和62年４月
谷山保健センターの新庁舎が谷山中央５丁目に完成し移転

平成12年４月
谷山保健センターから南部保健センターへ名称変更。地域保健係、健康増進係となる

写真２

昭和52年度の「保健師業務のまとめ」には、「地区住民の健康生活への保持増進を図る為にブロック内（谷山地区）の関係機関との連携を密にし、相互に援助協力して効率的な看護活動を行う」とあります。「ケースを中心とした継続看護を行うために医療従事者の連携を密にする。ホームヘルパーとの連携による老人の家庭看護を行う。へき地における地区住民のニードを把握して必要な看護支援を行う。交通機関に恵まれない地区並びに効率的な看護支援を行うために集団訪問を行う。地区組織との連携を密にする。」等の９つの目標が掲げられていました。看護職員・ホームヘルパーとの連絡会やケース検討会も実施されていたようです。

平成26年３月に日本看護協会から発行された「保健師活動指針活用ガイド」に示された保健師の保健活動の基本的な方向性が、時代を超えて一致していることに、改めて先輩方の保健師活動の歩みの偉大さに触れております。

保健師業務必携・業務のまとめ等を参考に抜粋しましたが、先輩諸姉方には文字にする事でよみがえる数々の思い出がおありだと思います。わずかな内容ではありますが、後輩にも伝わる機会になればうれしい限りです。

先輩方の活動を紡いでいけるように、力を合わせ取り組んでいけたらと、思います。

見知らぬ窓を開く

～学校フィールドノーツを紐解いて～

H16年卒　森　隆子

地域看護・看護情報学講座の教員にとご縁をいただき、早いもので着任して８年の月日が過ぎた。平成12年に保健学科へ入学して以来、一度たりとも大学を離れたことがないというのが、私の人生における数少ない「長く続いていること」の一つである。

このことが自慢と言えるかはさておき、私にとって、大学が切っても切り離せない存在であることに変わりはない。大学は、地域を学ぶことの豊かさを教えてくれた。学部時代には十分気づくことはできなかったことへも、研究や教育を通じて、改めて関心を熟成させていく機会を得ることができた。特に、学生が地域を眺めるときに見せる新鮮な感性や眼差しは、地域をも照らす光になると確信している。

「学生の見知らぬ窓を開く」

わが師である波多野教授より授かった言葉である。「学生の興味関心の矛先が、たとえ今求める方向になくともよい。学生が無礼をしたら教員が頭を下げればよい、学生の能力を引き出すことを最大限に考えよ、それが教育である」と如何なるときも言われ続けた。学生とのかかわりに手がかりを求める際、自身がなかなか地域に関心を持てずにいた頃の経験は肥しとなった。

あるとき、学生の見知らぬ窓を開くためには、まず自分自身の見知らぬ窓を開ける必要があると気づいた。その見知らぬ窓に自ら手をかけるよう、いつでもそっと待ち続けてくださった先生の眼差しにも、今更ながら気づく。

師のもつ愛の深さに追いつける日が来るかは分からないが、いつか背中を追い越す日を夢見て、歩いていきたい。

波多野先生の
退職される日を前に

新入会員紹介

平成26年 鹿児島大学医学部保健学科
看護学専攻卒業生 しおさい会入会者

編集後記

しおさい30号はいかがでしたか。お忙しい中、執筆にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

今年は2年に1度の総会です。どうぞ多くの方々のご参加をお待ちしております。その際会費を納入していただけますと、手数料が発生せず会費を有効に活用できます。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

第18回しおさい会総会後の懇親会余興担当は、昭和52年・53年、平成４年・17年卒業の方々です。久しぶりに同級生で集まって、楽しい時間を過ごしましょう！（文責　前野）